

越中武士団 義仲・巴と

まんがでわかる





富山県知事 石井 隆一

平家との倶利伽羅合戦前に、木曾義仲が小矢部市の埴生護国八幡宮に納めた祈願書には「今戦いを起こすのは、一身一家のためではなく、国民を救うため」と記されており、これまで逆賊・乱暴者のイメージで語られがちだった義仲は、実は情に深く、また、飢饉で餓死者が出るなど、都が混乱し地方が疲弊するなか、公家政治から武家政治への転換期に国を変えようと地方から身を起こした魅力的な武将であったと考えられます。

また、この時、共に戦った女武将の巴御前と義仲の関係は、まさに源平時代の男女共同参画の物語であり、さらに、義仲の北陸での戦いを支えた豪族の宮崎太郎長康や石黒太郎光弘などが、越中武士として平家の大軍と戦った姿には、越中人としての誇りを感じます。

この本を通じ、越中富山を舞台に活躍した義仲・巴と越中武士団について、幅広い世代の皆さんに親しみや興味を持っていただくとともに、ふるさとの魅力をさらに発見するきっかけとしていただければ幸いです。

木曾義仲と 越中武士団

木曾(源)義仲(二五四年~二八四年)

木曾義仲は平安時代の末期、源平合戦で活躍し旭(朝日)将軍と称されました。

義仲のもっとも有名な戦いは、富山県小矢部市と石川県津幡町の境にある砺波山(倶利伽羅峠)を舞台にした倶利伽羅合戦です。

そのため富山県内には義仲の足取りがたくさん残されています。

清和源氏。源氏の棟梁をめぐる勢力争いの末、幼くして父を失い、信濃国で育てられる。挙兵前の足取りについては諸説あるが、木曾町・松本市・朝日村・塩尻市・下諏訪町・上田市などに大変多くの伝承が残っており、長野県内を広く勢力範囲にしていたと考えられる。一一八〇年、以仁王による平家打倒の令旨をつけて挙兵し、信濃国各地の武士団の他、父の勢力範囲だった群馬県(上野国)北西部の武士も加え一大勢力を形成した。義仲の北陸方面への勢力拡大をおそれた平家は、越後の城氏率いる六万の軍勢を信濃へ送ったため、一一八一年横田河原(長野市)で合戦が起きた。そこで義仲は地の利をいかした作戦と地元武士・井上氏の奇策の採用によってわずか五千

騎で大勝利をおさめた。義仲の名声はさらに高まり、越中の宮崎・石黒氏をはじめとする北陸武士団が義仲の元に駆けつけ、その旗下に加わった。義仲は北陸諸将を厚く信頼し、越中の宮崎氏に以仁王の遺児である北陸宮を保護させ、平氏への防備を任せた。一一八三年になると信濃から北陸に至る大勢力を形成した義仲に対し、まずは源頼朝が侵攻してきた。義仲は「同じ源氏同士が争うなど平家の思いつぽ」と知略をもって戦を避け、和睦を結んだ。また北陸諸将から平氏来襲の知らせを受けると軍勢を率いて北陸道を西へ進んだ。そしていよいよ倶利伽羅合戦で決戦を迎えることになる。

義仲が生きた時代

平安時代の藤原氏を中心とした摂関政治が崩れ始め、院・天皇・摂政・関白の勢力が複雑に入り乱れ、それぞれに牽引していた武家(源氏・平氏)も絡んで政治が軍事行動によって解決されるようになった。その中で平家が台頭し、平清盛のころ栄華を極めるようになった。それに対し源氏は地方へ下り、各地の武士たちと関係を強めた。地方では都の混乱をよそに、武士たちが「所懸命」「自力救済」の心意気で、自ら土地を切り開き、守るうとしていた。木曾義仲は源氏という立場から地方の武士たちの仲介役や仲裁役にあたり、信濃や北陸

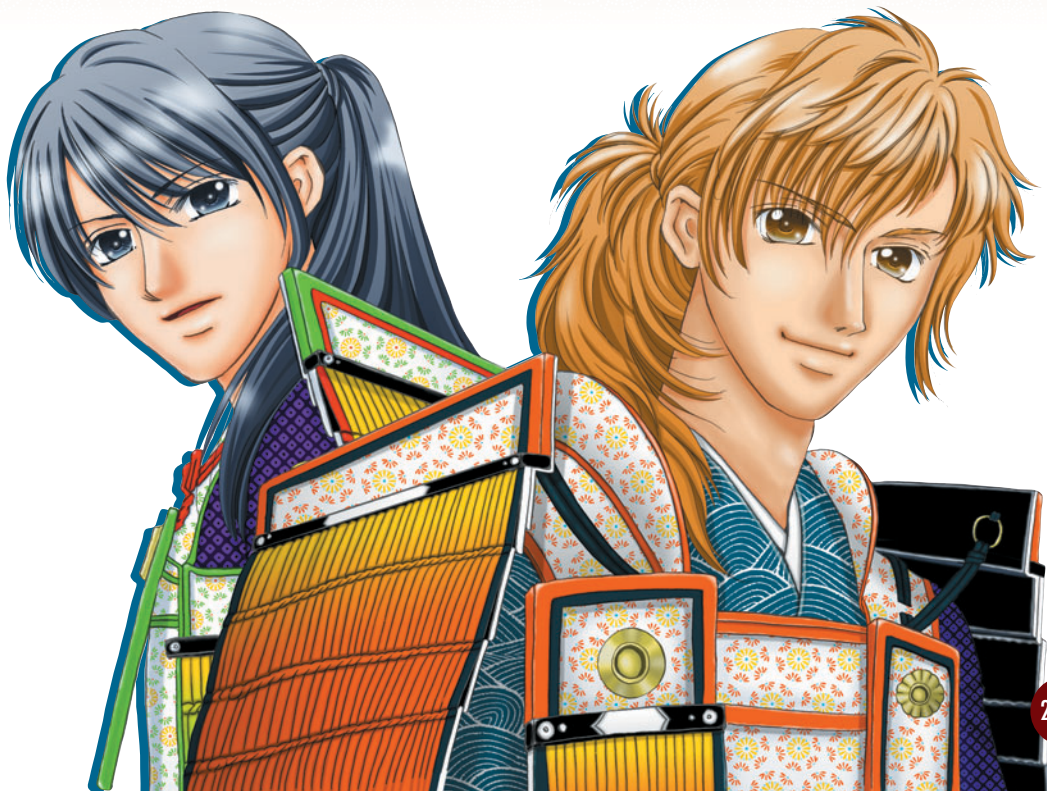
で勢力を伸ばした。

越中では、富山県西部の石黒荘(南砺市)・高岡市あたりを本拠地にする石黒党が、武士団を形成していた。また、関東部の朝日町では宮崎氏が佐味荘と宮崎港の交易で大きな勢力をもっており、入善地区の扇状地に武士団を形成していた。石黒党と宮崎党は県の両端に本拠地をもっていたが同族意識で結ばれており、義仲の元に石黒太郎光弘、宮崎太郎長康が武士団を率いて参陣した。特に宮崎太郎長康は義仲の厚い信頼を受け、打倒平家の以仁王の子「北陸宮」の保護を任された。



巴御前(生没年不詳)
義仲の傍につき従った女武将。義仲の養父・中原兼遠の娘で今井兼平、樋口兼光の妹といわれている。平家物語では「色白で髪が長い美人」で一騎当千の女武者として活躍が描かれ、特に源平盛衰記が合戦での活躍がふりや義仲の死後の様子について詳しい。
義仲の死後の巴御前の足取りに関する伝承やゆかりの寺社が全国各地に無数にあるが、終焉の地は今でも「巴松」が残る富山県南砺市でないかといわれている。

石黒太郎光弘(生没年不詳)
富山県西部、南砺市・高岡市の広範囲にわたる武士団・石黒党を形成し大きな勢力をもつ。平家物語では、燧ヶ城の戦い、安宅の戦い、倶利伽羅合戦で活躍しており、特に源平盛衰記に詳しく描かれている。本拠地である石黒荘は平安時代初めから続く大変古い荘園で、後に八条女院領となり、都との関係も深かったと見られる。



宮崎太郎長康(生没年不詳)

富山県朝日町を中心とし、新潟県糸魚川市付近も勢力下におさめる武将。宮崎党を率いる。入善地域の荘園の他、宮崎港の交易などで勢力を強める。平家物語では、燧ヶ城の戦い、安宅の戦い、倶利伽羅合戦での奮闘が記されている。特に長門本では家臣団や義仲との詳細なエピソードが紹介されている。